

# 認知意味論による日本語複合動詞の習得研究 —松田文子(2004)についての紹介—

王 亜茹

## 0. 書誌情報

松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究 — 認知意味論による意味分析を通して—』ひつじ書房 ISBN:4-89476-204-C3081 全242ページ。

## 1. 本書の概要

本書は松田文子氏が2002年にお茶の水女子大学に提出した博士号の学位論文を改定し、2004年に出版されたものである。

本書は認知意味論を援用した複合動詞習得支援のための効果的な意味提示のあり方を提案している。著者は複合動詞「～こむ」を事例にし、その多義的な意味構造をどのように捉えられるか、また学習者は「～こむ」の多様性に対してどのような意味知識を持っているか及び語彙能力を高められるような語彙習得支援のためにはどのようにアプローチしていけばよいかについて論じている。具体的には、まず「～こむ」の意味構造をコア図式<sup>1)</sup>によって表現するという方法を見出し、またそれを踏まえて多義語習得研究の事例を示し、さらに語彙習得支援(意味提示のあり方)への応用という三本柱のもとで説明している。

## 2. 本書の構成

序章と終章を除いて、章立ては以下の通りである。  
第1章:複合動詞研究の概観  
第2章:第二言語習得における語彙習得研究  
第3章:「～こむ」の意味構造はどのように捉えら

れるか

第4章:「文の産出」にみられる「～こむ」の意味知識

第5章:「文の受容」にみられる「～こむ」の意味知識

第6章:語彙習得への教育的示唆と習得支援の方向性

第7章:認知意味論に基づいた新しいコンセプトによる意味提示方法の試案

第1、2章では、主に先行研究の概観を中心としている。第3章は、意味論的な考察であり、第4、5章で行う習得研究の調査データの分析の枠組みを示すものでもある。第4、5章では、語彙習得研究を行っている。第6章では4、5章の結果を検討し、コア図式による「～こむ辞典」を作成し、語彙習得支援の考えを示している。そして第7章では、具体的な語彙項目を挙げながら、コア図式による辞典の記述方法を挙げている。なお、第3、4、5章は第6、7章で提案する意味提示のあり方の基礎となり、本紹介文はこの三章に絞って紹介する。

## 3. 「～こむ」の意味研究

第3章は「～こむ」の意味研究を行っている。まず先行研究に基づき、「～こむ」の意味用法を表1のように2種類4タイプに分類した。なお、V1は複合動詞の前項動詞を指し、V2は後項動詞を指している。

表1 「～こむ」の用法の分類

二格を伴う「～こむ」		二格を伴わない「～こむ」	
Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ	Dタイプ
VIは「内部移動」を 含意しない	VI自体が「内部移動」 を含意する	VIが示す状態への変化 とその状態への固着	VIの反復行為により生じ る状態変化(目標に向けて)
例)飛びこむ 呼びこむ	例)入りこむ 植えこむ	例)冷えこむ 眠り込む	例)十分に走りこむ

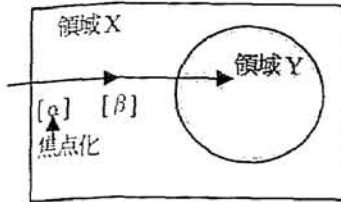


図 1-1. Aタイプ「～こむ」のイメージ図式

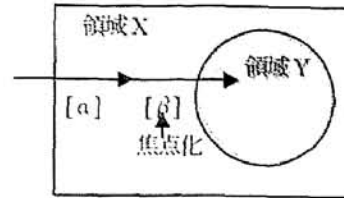


図 1-2. Bタイプ「～こむ」のイメージ図式

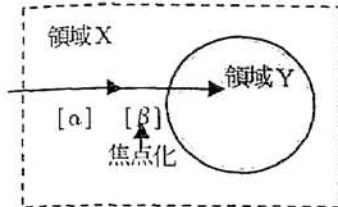


図 1-3. Cタイプ「～こむ」のイメージ図式

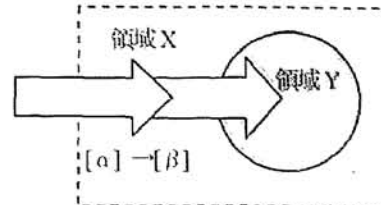


図 1-4. Dタイプ「～こむ」のイメージ図式

そしてそれらのタイプごとに、著者は「～こむ」のイメージ図式(コア図式)を想定し、それぞれの意味的差異を焦点化によって捉えてみた(図 1-1～1-4)。従来の意味的研究は、その意味を細かく分類することに主眼を置かれていたが、これに対し、本書は一見複雑に見える「～こむ」の用法はコア図式のバリエーションとして捉えることができると示している。

このように、A、B タイプの意味的差異はその目的に視点が置かれたこと(焦点化)により、違う意味が発生すると解釈できる。

また A、B タイプと比べ、C、D タイプは領域 X が点線となっている。それは抽象的な領域であることを意味する。そして C タイプにおける状態への変化(移動)は一般的に緩やかである。D タイプは反復行為によって「満足しない状態」から「満足する状態」(領域 X)へ、さらに目標が達成できる状

態(領域 Y)に留まるという固着的ニュアンスを併せ持っている用法であると解釈できる。

#### 4. 学習者における「～こむ」の習得研究

##### 4.1 第 4 章:「文の産出」にみられる「～こむ」の意味知識

###### 4.1.1 調査概要

調査概要は表 2 の通りである。また、この 3 つの研究課題を明らかにさせるために、図 2 のような流れで調査を行った。

###### 4.1.2 第 4 章の各研究課題の結果及び考察

RQ1-1 においては、習得しやすいと思われる A タイプの低受容度が一番高く、次に高いのは B タイプ、D タイプという順番で、C タイプの低受容度が一番低いことが分かった。そして、RQ1-2 では、学習者は実際の使用に当たる過剰使用の原因は理由 i～viii 及び理由ア～カにまとめられている。具体的な内容については松田(2004:97-99)に参考さ

表 2 「文の産出」にみられる「～こむ」の意味知識の調査概要

目的	学習者の「～こむ」の習得状況について調査し、習得困難点を見つけ出す。	
研究課題	RQ1-1. 「VI+こむ」の意味の習得状況はどのようなものか。 RQ1-2. 学習者は実際の使用に当たってどのような過剰使用をするか。 RQ1-3. 「VI+こむ」の 4 種の意味タイプにおける習得困難点は何か。	
調査対象者	(1) 日本語学習者(NNS): 上級者 10 名(韓国 5 名、中国 5 名) (2) 日本語母語話者(NS): 3 名	
調査項目	A タイプ 24 語、B タイプ 17 語、C タイプ 9 語、D タイプ 4 語 計 54 語	
調査方法	2 段階の手続き 第 1 段階: 学習者を対象とした調査方法 第 2 段階: 母語話者による判定	

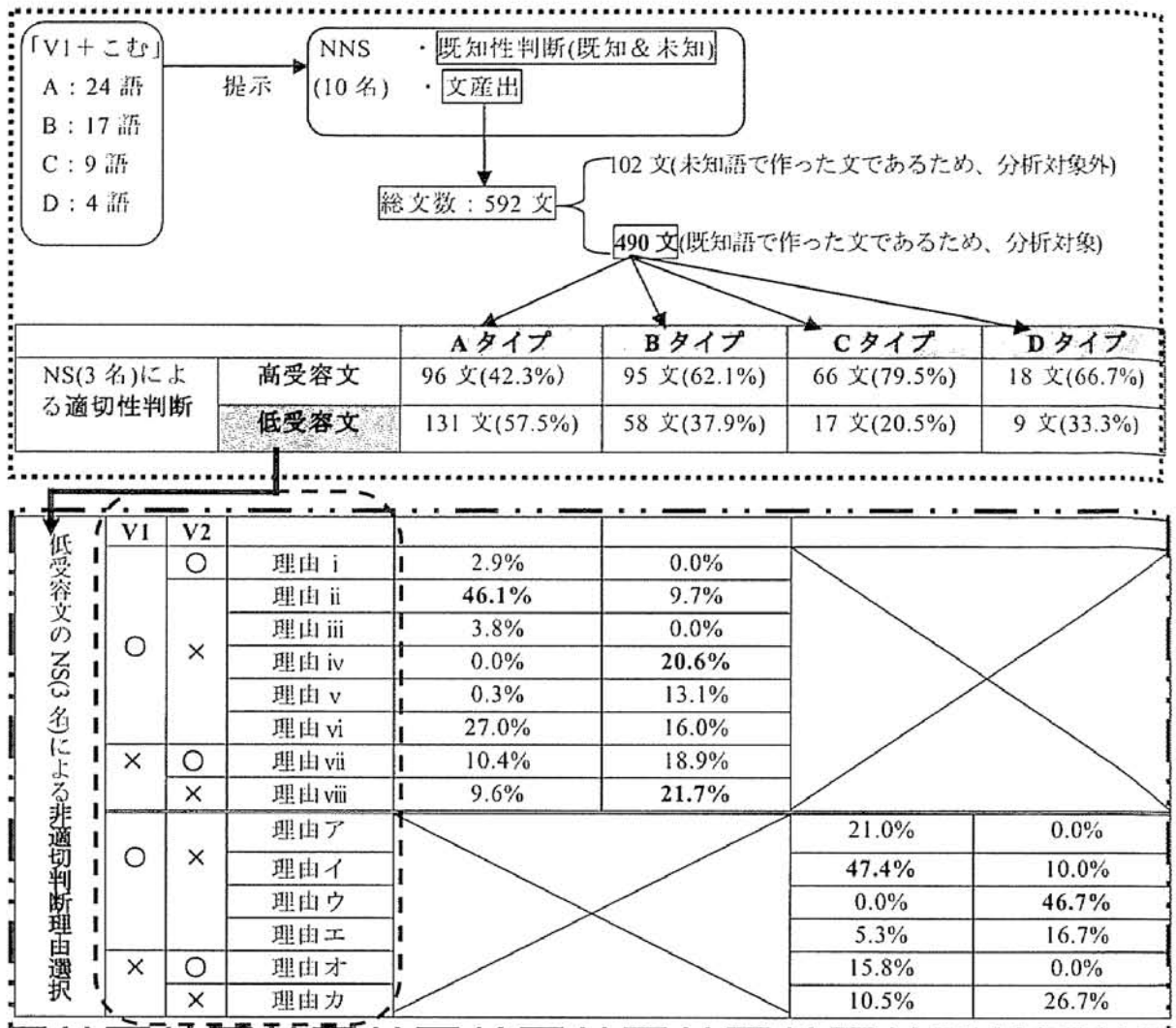


図 2. 「文の産出」にみられる「～こむ」の意味知識の調査の流れ

注:   内は(RQ1-1)        内は(RQ1-2)        内は(RQ1-3)

りたい。さらに、RQ1-3 では、母語話者による非適切判断理由選択が行われ、数字化により、どの理由で過剰使用が高いのかを明らかにした。またそれにより、学習者の習得困難点も推測できる。

A、B タイプの過剰使用の結果から、学習者は「N+VI」⇔「N+{VI+こむ}」といった図式を表象し、その図式を過剰に適用することで低受容文を生み出していることが推測される。即ち、V1 の使える状況を想起してそのまま「～こむ」をつけてしまったことが伺える。例えば「机の上にはいろんなものが積んである」⇔「\* 机の上にはいろんなものが積みこんである」、また、「彼は死体を埋めた」⇔「\* 彼は死体を埋めこんだ」として理解されるため、

低受容文を生み出してしまふ。但し、「N+VI」⇔「N+{VI+こむ}」図式による過剰に適用されているとして説明しうるのは、理由 ii) iii) iv) v) vi) (約 75%) だけであり、理由 vii) viii) は学習者母語の影響などによるものだと考えられる。また、B タイプはニュアンス性の高い項目であり、ある程度「N+VI」⇔「N+{VI+こむ}」図式に適用できるため、低受容率率が A タイプと比べ、少ないという結果になっているが、B タイプの「VI+こむ」が用いられる状況は文脈に依存しており、この点においては A タイプより習得が難しいと推測できる。

C、D タイプの過剰使用の結果から、A、B タイプと同様、やはり「N+VI」⇔「N+{VI+こむ}」

図式の過剰適用をしている可能性が高い。C タイプの低受容率が最も低かった理由については、「～こむ」が V1 の状態変化に強調の意を添えるタイプであることから、「N+V1」≒「N+{V1+こむ}」図式が機能したと考えられる。但し C、D タイプにおいても、学習者が形成した方略の過剰適用として説明できるのは、理由ア)～理由エ)までの過剰使用(74%)であり、理由オ)と理由カ)については別の説明が必要である。

#### 4.2 第 5 章:「文の受容」にみられる「～こむ」の意味知識

##### 4.2.1 調査概要

調査概要は表 3 の通りである。また、この 2 つの研究課題を明らかにさせるために、まず調査項目の 90 文を調査対象者に提示し、文の受容性判断をもらった。また、7 名の調査対象者に対し、フォローアップ・インタビューを行い、学習者と母語話者の受容性判断の異なりについて追求した。調査の流れは図 3 の通りである。

##### 4.2.2 第 5 章の各研究課題の結果及び考察

RQ2-1 においては、調査対象者による受容性判断の結果は異なることが分かり、母語話者は「期待さ

れる回答」に対して概ね 90%以上が期待通りの反応を示しているのに対し、学習者は揺れている(表 4)。また RQ2-2 では、学習者と母語話者の反応が異なった要因として次の 4 点が明らかになった:①「V1+こむ」は「外部から何らかの内部への移動」を意味するということが十分には了解されていない。②「積みこむ」「運びこむ」「厚けこむ」また「書きこむ」など「V1+こむ」の意味が母語話者とは異なるイメージで解釈される場合がある。③意味理解において「V≠V1+こむ」図式を過剰に用いる傾向が強く、そのため「V1」と「V1+こむ」の意味的差異が明確に使い分けられていない。④D タイプの「～こむ」の用法は馴染みがない。これらは即ち、母語話者が「～こむ」について持つ意味知識は、学習者には獲得されていない意味知識でもあること(学習者の習得困難点)である。

表 4 のように、学習者は A、B タイプにおいて、非受容文の適切判断の正解率は 51%、52%であったが、フォローアップ・インタビューにより、A タイプにおいては、「外部から内部への移動」は捉えきれていないことなどが、B タイプにおいては、母語話者と比べ、学習者ははっきりした判断基準を持た

表 3 「文の受容」にみられる「～こむ」の意味知識の調査概要

目的	学習者の「～こむ」の習得状況について調査し、習得困難点を見つける。
研究課題	RQ2-1. 学習者は「V1+こむ」文を母語話者と同様に受容(または非受容)するか。 RQ2-2. また二者に「文の受容」の異なりがみられたとして、その反応の違いはどのような要因により生じるか。
調査対象者	(1) 日本語母語話者(NS): 30名(20代～50代の日本語教育関係者及び一般人) (2) 日本語学習者(NNS): 上級者 60名(韓国 30名、中国 30名)
調査項目	A タイプ 10 語:受容 11 文+非受容 19 文、B タイプ 10 語:受容 10 文+非受容 20 文 C タイプ 6 語:受容 6 文+非受容 12 文、D タイプ 4 語:受容 8 文+非受容 4 文 合計:90 文
調査方法	・文の受容性判断: 調査対象者(NS 及び NNS)全員 ・フォローアップ・インタビュー: NS:3 名、NNS:4 名

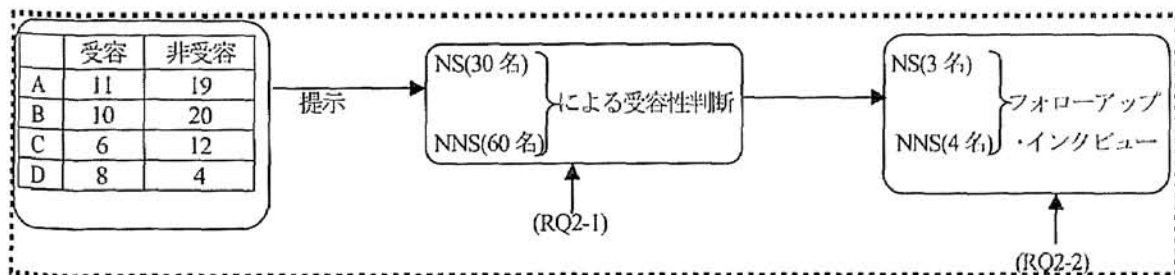


図 3 「文の受容」にみられる「～こむ」の意味知識の調査の流れ

表4 「期待通りの反応」の比率

		期待される回答	母語話者(30名)	学習者(60名)
(+) 二格	Aタイプ (30文)	受容	95%	76%
		非受容	90%	51%
	Bタイプ (30文)	受容	92%	79%
		非受容	92%	52%
(-) 二格	Cタイプ (18文)	受容	96%	68%
		非受容	89%	58%
	Dタイプ (12文)	受容	96%	60%
		非受容	95%	68%

注:「%」が付いている数字は母語話者及び学習者の正解率である。

ないまま何となく判定をしていることなどが推測された。従って、受容文の場合は、「内部への移動」は見過ごされやすいことに対し、非受容文の場合は、適切な判断が下されないことになってしまう。Cタイプでは、①共起する名詞選択に関わる項目及び②「～こむ」を付加することによって意志動詞が無意志動詞化する項目という2つの視点は、学習者に対して指導が必要である。また、③「～こむ」を取っても意味上ほとんど変わらない項目においては、ニュアンスの問題であるため、母語話者にも揺れが視測された。Dタイプでは、学習者は馴染みがないため、特に理由なく判定をしたことが多い。従って、今後の学習指導においてはこれらの問題点について、留意しなければならない。

## 5. 終わりに

本書は複合動詞「～こむ」を事例にし、認知意味論を背景とするコア図式を援用し、複合動詞の

意味提示のあり方を提案している。著者はこの分野を切り開いた第一人者であり、複合動詞習得に大いに貢献した。

今後の課題としては、「～こむ」だけではなく、コア図式による他の複合動詞の分析も必要であり、またコア図式の学習効果などについても確認する必要がある。

## 注

1. コアは田中(1990)が用いた用語で、多義語の持つ多くの語義を全て包括し、文脈に依存していない中心的な意味を表す。コア図式とは、多義語の全ての意味を1つのイメージ図式として記述され、その多様な用法が焦点化により捉えられる図式である。

## 参考文献

- 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して—』ひつじ書房  
 田中茂範(1990)『認知意味論—英語動詞の多義の構造—』三友社

おう あじょ／お茶の水女子大学大学院 比較社会文化学専攻

oajyowang@yahoo.co.jp